

第一種健康診断特例区域等の 検証に関する検討会（第4回）	資料 1 - 2
令和3年7月2日	

# 鎌田構成員提出資料

## 修正資料について

前回の指摘事項について

資料 1 - 1

2 頁

第 2 回検討会での鎌田構成員提出資料の被爆状況等について

枠内の記載

集団間の比較をしているもの（疫学調査等）で特に入市被爆者に  
焦点をあてているもの

8,10,15,17

集団内の状況について述べている者（体験記等、症例記述等）

入市被爆（投下後 2 週間以内に爆心地から 2km 圏内へ立入り

1,2,5,11,13

第一種健康診断特例区域、フォールアウト関連

3,4, 6,7,9,12,14(16)

上記のように修正して頂きたい。

理由は会議の時に申し上げた通りである。すなはち、**3,6,7,9,14(16)**は直接被爆に関し  
て述べたものではなく、フォールアウトに関しての科学的な所見を述べたものである。

”泥雨”について座長からの質問(第2回検討会、資料1-1)に「木灰を溶かしたような雨という意味の、かなりどろどろしたぐらいの濃度の濃ゆいものを泥雨と表現しているようであります」と返答をしましたが、科学的所見を加え付言します。

泥雨は、当時、複数の地点で確認されています。科学的調査はその中で宇田区域の一番南側に位置する高須地区で行われております。

宇田論文108頁には「黒き泥分多きため粘り気あり」「雹の如き大粒の雨、身体には痛いほど粗い粒の雨」、「筆者の次男が山奥の学童疎開から帰って来て、雨に打たれた雨戸のそばに寝ていたが**脱毛**し始め急ぎ片づけた」「この雨戸に付着した泥分を採取し、理化学研究所佐々木・宮崎氏に調べてもらったところ、爆発2カ月経過しても、**爆心地の数倍のすこぶる強大な放射能であった**」、「己斐高須方面の人は**爆発後約3か月にわたって下痢をするものがすこぶる多数に上がった**。水道破壊のため井戸水、地下水を飲用したことが関与するものと推察される」とある。

# 泥雨の付いた壁

宇田宅  
(高須)

八島宅  
(高須)

爆心地

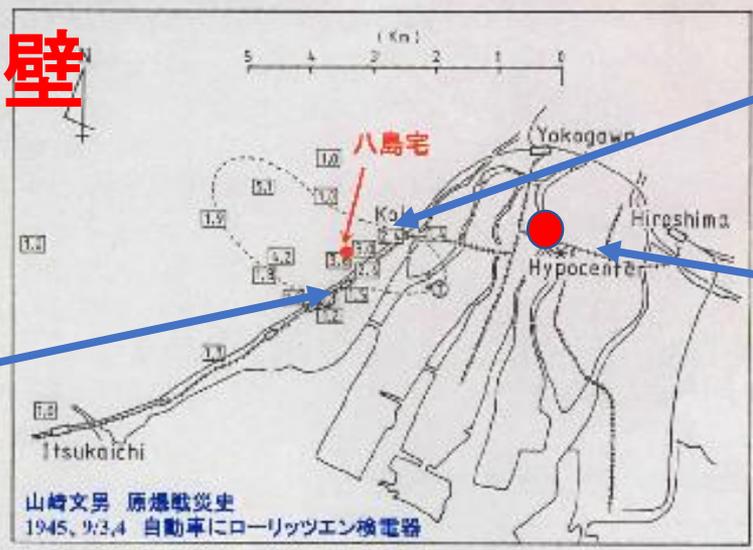


図 14 黒い雨壁面の八島宅と山崎文男氏のヒロシマ西部地域における線量測定

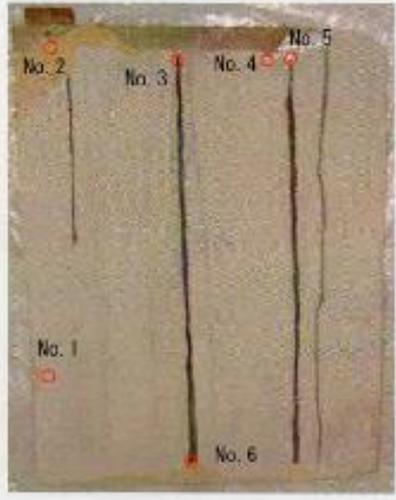


図 15 昭和 60 年に切り取られた壁面

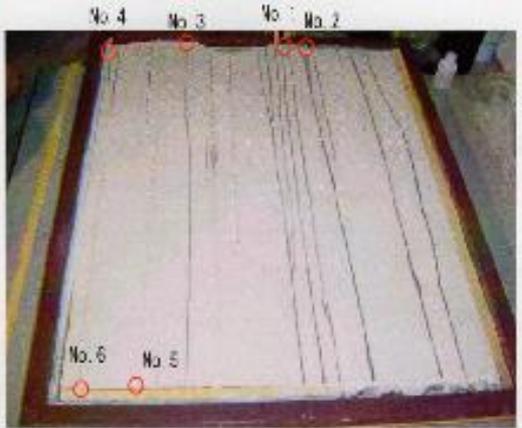


図 16 昭和 42 年に切り取られた壁面

八島宅  
泥雨の付いた壁

(広島原爆資料館  
寄贈昭和42年)

# 「黒い雨」壁面測定結果(昭和60年、1985)

表1 広島における  $^{137}\text{Cs}$  測定データのまとめ

サンプル	$^{137}\text{Cs}$ 濃度		強度比
→ 1) 爆心付近	$1.3 \pm 0.7 \text{ mBq/cm}^2$	$0.13 \times 10^8 \text{ Bq/km}^2$	1/37
2) 理研土壌サンプル			
・ 10 サンプル平均 (No. 7 を除く広島市内)	$1.5 \pm 0.2 \text{ mBq/cm}^2$	$0.15 \times 10^8 \text{ Bq/km}^2$	1/32
・ No. 7	$49.3 \pm 5.2 \text{ mBq/cm}^2$	$4.9 \times 10^8 \text{ Bq/km}^2$	1
→ 3) 「黒い雨」壁面	$48.5 \pm 22.5 \text{ mBq/cm}^2$	$4.85 \times 10^8 \text{ Bq/km}^2$	1
4) 核実験フォールアウト		$37 \times 10^8 \text{ Bq/km}^2$	7.6

(1980年以前、北緯30-40° UNSCEAR1982)

「黒い雨」壁面は爆心地付近土壌サンプルと比べ**37倍高い**放射能強度を示した。宇田宅は八島宅の近所であり、宇田論文脚注を科学的に裏付ける所見と考える